

食堂経営の赤石武範

みんなで5畝

私はみどり市笠懸で50年以上続く食堂「かしわ屋」の2代目をやっています。現在46歳で13年前に先代を亡くし、厨房でひとり調理をしています。



かしわや屋外観

毎日ガムシャラに仕事をして、それでも売上があがらずの日が続いていましたが、家族の力をかりて何とか軌道にのり始めた頃に、十日町の松之山という所で米作りの体験ができる機会ができました。高校の同級生と担任の数人で米作りをするプロジェクト。

その名も「みんなで5畝」。とても良いネーミングだと思いました。2015年5月中旬、同級生の車にのせてもらい、「いざ松之山へ」。

鳥肌

初めての道だったので少し遠回りになってしまい、池尻という交差点から浦田方面に向かって行った。でもね、そこから見た風景が最高だった。僕の松之山通いの原点はこのときの風景だ。

その日は快晴で、空の青、山の緑、田植えしたての田んぼの茶、近くを流れる渋海川、全てがとてつもなく力強く感じた。感動しすぎて涙が出そうになった。それですぐ思いついたことが、嫁さんと子供2人に見せたいと思った。

その年の8月に大巖寺高原でやっていた夏の雪祭りに一泊で連れて行き、何でここが好きになったかを理解してくれた。今でも5月

に行くときは、少し遠回りして力強い風景を見てから行っている。松之山の風景を見ているととても元気になれる。

子供たちにはいろいろな体験をさせてやれた。稲刈りや古民家での宿泊。でも一番印象に残っているのは夜が真っ暗で静かなこと。「夜の闇恐え」と言っていました。

引き出し

「みんなで5畝」は本当に楽しかった。右も左もわからない大人たちがへっぴり腰で田植えをしている光景は、地元の方から見ればおもしろかったろう。でも3年ぐらやっていて少し流れがわかってきて、長靴と竹笠帽子も板についてきた。



棚田の稲刈り風景

田んぼの作業の中でもきついのは「みぞ切り」だ。稲刈りに向けて田の水を抜く水路を作る作業。この労力は半端ではなかった。ただこうやって自分の中の引き出しが増えることも松之山に行く理由です。

「みんなで5畝」でお世話になった小見重義さん（1950年生まれ）とは今でも交流させてもらっている。毎年ワラビ採りもさせてもらっている。これまたかなり楽しい。勝手に採ると泥棒になってしまうので、小見さんに付いてきてもらっている。今ではどこら辺にあるか分かるようになってきた。今は12月だけど来年の5月が楽しみではない。

そして2024年の僕は新たな引き出しを手に入れた。それはエンジンで動く草刈り機。これも最初は草に負けそうなへっぴり腰だったけど、作業終わりの頃には一丁前になった気がした。しかし、草と花の違いは分からないのでただバーサーカーのように刈ることしかできない。



草刈り作業を伝授!

温泉

「みんなで5畝」をやっていると宿泊する機会が増える。そのときの楽しみが温泉だ。日本三大薬湯というだけある。疲れがよく取れる。以前子供たちと稲刈りで泊まりがけで来たとき、鷹の湯という温泉に入った。子供たちは家に帰ってきてから、嫁や母にこの温泉のことをアツく語っていた。

僕のお気に入りには外から露天風呂が丸見えの施設だ。こういうところに松之山のおおらかさを感じる。

新みんなで5畝

「みんなで5畝」もコロナがあり無くなってしまったかと思った。しかし2024年に奇跡の復活。以前いっしょに参加していた同級



「みんなで5畝」で泊まる民家と棚田

生はひとりもいなくて、年長の方たちばかりだが、農作業の後の宴会(反省会)が楽しい。小さな卓を囲んで大人数でワイワイ飲むのは幸せだ。

僕は店の食材で料理を作って持って行く。

「ブナのしずく」という米を作っている農家さんと仲良くなる機会ができた。本当においしい米を作っています。親子で作っていて、その息子さんと仲良くなれた。僕よりも歳は若いけれど強い信念を持って仕事をしている。もしかしたらこの米を店で使うことができるかもしれない。そうなればこの先もずっと長く松之山とつながっていられるだろう。

少しでも長くつきあっていくためにも仕事をがんばっていきましょうと思います。

「赤石くんのこと」

船橋聖一

赤石くんは1994年、桐生工業高校機械科に入学して担任となった私と出会った。

3年間の付き合い。最初のHR合宿をやったころから彼の表情に笑顔が見え始めた。

父が経営する「かしわ屋」へ家庭訪問したとき話が弾んで、保護者懇親会を「かしわ屋」で開くことにした。貸し切りでエンドレス。私は生徒たちの学校での様子をスライドにして「かしわ屋」の壁に映した。今じゃ、HR合宿も全員家庭訪問も保護者懇親会もスライドも時代遅れだ。

「みんなで5畝」は2015年から19年まで5年間やった。前工卒業生グループ、桐工卒業生グループ、桐工元同僚グループがそれぞれ5畝をつくる。それぞれが田植え、草刈り、稲刈りの3回泊まりで松之山に来る。泊まるのは私が借りた市営住宅。私の師匠の小見重義さん(74)が協力してくれた。9000円の生産費を各自が負担して、25~30kgほどのコシヒカリの分配となった。

2024年に「新みんなの5畝」が復活した。前工卒の3人(53歳)、赤石くん、新田暁高校卒のひとり(30歳)と私(70歳)の6人だ。田んぼも黒倉集落から水梨集落に変わり、協力者も相澤幸夫さん(72)、相澤晴洋さん(38)になった。みんな嬉しそう